KLS Selected Papers 5, pp. 49-64, 2023

コピュラの階層位置について

森山 倭成
鳴門教育大学

要旨

本論では，コピュラの「だ」と「です」がどのような階層位置に現れるかという問題について議論する。先行研究では，「のだ」文や「のですか」疑問文や埋め込み節や「のだろう」文に現れるコピュラの「だ」と「です」が FocP の主要部に生起すると提案されている (Hiraiwa & Ishihara 2002, 2012 など)。本論では，これらの構文に含まれるコピュラは FocP には生起しておらず，TP より下位の CopP に現れることを論じる。想起の「た」，「であります」との交替，否定事態の推量を表す「まい」などのデータからこのことを示す。加えて，「だ／です」の構造位置だけでなく，「である」「ます」「であります」などの関連する形式が配置される統語的な位置についても考察する。

1 はじめに

本論では，コピュラの「だ／です」の構造位置について議論する。(1) に例示するように，「のだ」文の文末には「だ」や「です」が現れる。

(1) 太郎は花子と話をしたの｛だ／です｝。

(1) のような文に現れる「だ」や「です」の階層位置に関してはいくつかの可能性があり，そのうちの 1 つに，コピュラの「だ／です」が，(2) のように，FocP の主要部に基底生成されるという考え方がある。近年，コピュラの Foc 主要部仮説はさまざまな先行研究で採用されている (遠藤・前田 2020; Hiraiwa & Ishihara 2002, 2012; Kuwabara 2013; Maeda 2014; Noguchi 2020, 2021; Ono 2006 など)。

(2) $[_{\text{FocP}}$ …… $da_{\text{Foc}}]$

本論では，コピュラの Foc 主要部仮説に異議を唱える。コピュラ「だ／です」が TP より下位の CopP の主要部に基底生成されることを想起の「た」，「であります」との交替，否定事態の推量を表す「まい」に関わるデータにもとづいて示す。

---

* 本稿は，関西言語学会第 47 回大会 (2022 年 6 月，オンライン開催) における口頭発表にもとづいています。重要なコメントを頂いた査読者と編集委員会の先生方に心より御礼申し上げます。もちろん，本稿に残された不備や誤りの責任は著者にあります。本研究は JSPS 科研費 JP22K19993 の助成を受けています。

(3)　[$_{TP}$ [$_{CopP}$ …… *da/desu*$_{Cop}$] T]

本論の議論は以下のように進める。2 節では，コピュラの Foc 主要部仮説を採用している先行研究について概観する。3 節では，コピュラの構造位置を特定するにあたって手がかりとなる丁寧語とモーダルの構造的な位置に関する本論の想定を提示する。4 節では，想起の「た」の接続に関するデータから，コピュラの Foc 主要部仮説の問題点を指摘する。5 節では，「であります」との交替に関する事実にもとづいて，コピュラが TP より下位に基底生成されることを論じる。6 節では，否定事態の推量を表す「まい」に関するデータから，コピュラの「だ／です」が CopP の主要部に基底生成されることを示す。7 節はまとめである。

2　コピュラの Foc 主要部仮説

本節では，コピュラの Foc 主要部仮説について概観する。コピュラの Foc 主要部仮説はさまざまな構文で採用されているが，本論では，「のだ」文と「のですか」疑問文と埋め込み節と「のだろう」文に現れるコピュラの「だ」や「です」に絞って議論する。[1]

Hiraiwa & Ishihara (2002, 2012) は，Rizzi (1997) のカートグラフィーの枠組みのもとで，「のだ」文の「だ」が Foc 主要部を占めるという提案を行っている。なお，Hiraiwa & Ishihara (2002, 2012) は「のだ」文を in-situ focus 文と呼んでいるが，ここでは三原・平岩 (2006: 266) に従って「のだ」文という名称を用いることにする。(4b) に示されるように，「のだ」文の「の」と「だ」はそれぞれ FinP の主要部と FocP の主要部に現れる。[2]

(4)　a.　太郎が来たのだ。　　b.　[$_{FocP}$ [$_{FinP}$ [$_{TP}$ ……] *no*] ***da***]

Kuwabara (2013) は，(5a) の「のですか」文に現れる丁寧語「です」が Foc 主要部を占めるとしている。(5b) のように，「の」と「か」は FinP と ForceP に，「です」は FocP に現れる。

(5)　a.　太郎は何を読んだのですか。

　　b.　[$_{ForceP}$ [$_{FocP}$ [$_{FinP}$ [$_{TP}$ ……] *no*] ***desu***] *ka*]

「だ」は，(6a) にみられるように，埋め込み節にも生起できる。Maeda (2014: 21)，遠藤・前田 (2020: 68) や Noguchi (2020, 2021) は，「のだか」という語の連鎖に含まれる「だ」が FocP の主要部に現れると想定している（これは，補文標識「のかと」に関する Saito (2012, 2015) の研究を発展させた分析である）。

(6)　a.　太郎は誰が来たのだか知らない。

　　b.　[$_{ForceP}$ [$_{FocP}$ [$_{FinP}$ [$_{TP}$ ……] *no*] ***da***] *ka*]

また，Ono (2006) は，(7) のように，「のだろう」文に含まれる「だ」が Foc 主要部に現れるとしている。

---

[1] 分裂文に現れるコピュラの「だ」に対しても Foc 主要部仮説が採用されている (Hiraiwa & Ishihara 2002, 2012)。この分析の問題点については，森山 (2022b) を参照。

[2] 文法化を経てコピュラが焦点助詞 (focus particle) に変化する傾向があることからこの仮説が提案されている (Hiraiwa & Ishihara 2012: 151, footnote 10)。コピュラは焦点助詞になっているため，FocP を投射すると考えられている。

(7)　a.　太郎が来るのだろう。

b.　[$_{MoodP}$ [$_{FocP}$ [$_{FinP}$ [$_{TP}$ ……]　*no*]　***da***]　*roo*]

これらの仮説は，各構文に現れるコピュラが FocP の主要部を占めていることを含意するが，共通の問題点として，コピュラが Foc 主要部に生起していることを支持するような経験的証拠が挙げられていない。3 節以降では，これらの仮説の問題となる言語事実を示すとともに，コピュラが CP より下位に生起していることを論じる。

3　丁寧語とモーダル

コピュラの構造位置を特定するにあたっては，丁寧語とモーダルの統語的特性が有効な手がかりとなるので，本節では，丁寧語とモーダルに関する本論の想定を示す。丁寧語には，CP に主要部移動するものと CP に基底生成されるものがあることを論じ，モーダルには，CP に基底生成されるものと CP より下位にとどまるものがあることをいくつかのテストにもとづいて論じる。

森山 (2022a, b) で議論されているように，日本語の丁寧語は大きく 2 つに分類できる。1 つ目は，森山 (2022a, b) が丁寧語 A と呼んでいるもので，(8) のように，動詞文や名詞文の肯定文に現れる。丁寧語 A は，(8c) のように，TP より下位に基底生成され，その後 CP への主要部移動を起こす (Miyagawa 1987; cf. Miyagawa 2012, 2017, 2022[3])。

(8)　a.　太郎は帰りました。

b.　昨日は雨でした。

c.　[$_{CP}$ [$_{TP}$ …… ~~*masu/desu*~~]　*masu/desu*]　(丁寧語 A)

丁寧語 A が TP より下位に外的に併合されることは，TP の主要部を占める時制要素の「た」の左隣に現れていることからも支持される（丁寧語 A の「ます」と「です」が基底生成される構造位置については 6 節で議論する）。日本語は主要部後行型言語であることから，右側に現れる主要部要素が階層的に高い位置に現れる。そうすると，「た」より左側に現れる「まし」や「でし」は TP より下位に生起していると考えることができる。

丁寧語 A が CP に移動するという点は，伝聞を表す「そうだ」への埋め込みのテストから確認できる。伝聞を表す「そうだ」の補部には，(9a) のように時制要素を埋め込むことができるが，(9b) のように，CP に現れるモーダルの「まい」や終助詞の「よ」と「ね」は埋め込むことができない。この観察に基づき，伝聞を表す「そうだ」は，(9c) に示されるように，TP を補部に選択すると想定する。

(9)　a.　[太郎が本を読んだ] そうだ。

b.　*[太郎が本を読む｛まい／よ／ね｝] そうだ。

c.　[$_{TP}$ ……] そうだ

丁寧語 A の埋め込みの可否を確認すると，(10) が示しているように，丁寧語 A を伝聞の

[3] Miyagawa の一連の研究では，丁寧語が認可される投射として発話行為句 (Speech Act Phrase) が提案されているが，本論の趣旨から外れてしまうため，この点には深く立ち入らない。

「そうだ」の補部に埋め込むことはできない。

(10)　*[太郎がそれを読みました] そうです。

丁寧語 A は CP に移動する要素であり，かつ「そうだ」の補部に TP をとるという想定から，(10) は，丁寧語の移動先となる CP が欠如しているために不適格となると考えることができる。

2 つ目は，丁寧語 B と呼ばれているもので，(11a, b) のような例がある。

(11)　a.　太郎は賢かったです。　　b.　太郎はそれを食べなかったです。

丁寧語 B は，典型的には，(11a) のように，形容詞文に現れる。動詞文や名詞文の否定文にも現れることがあり，(11b) では動詞文の否定文に丁寧語 B の「です」が現れている。否定辞「ない」は，統語範疇の観点からは NegP の主要部を占めるが，活用の観点からは形容詞と同じ活用をする。つまり，丁寧語 B は，形容詞型の活用語が含まれる文に生じるという特徴がある。動詞文の肯定文では，「*太郎は来たです」が容認されないことからわかるように，丁寧語 B の「です」は生起できない。この例では形容詞型の活用語が含まれておらず，丁寧語 B の生起条件が満たされていないために，不適格となるのである。

森山 (2022a, b) に従い，丁寧語 B は，(12) のように，CP に基底生成されると仮定する（類似の分析については，Miyagawa (2022) や Tomioka & Ishii (2022) も参照）。

(12)　[$_{CP}$ [$_{TP}$ ……] *desu*]（丁寧語 B）

その根拠となるのは，語順と伝聞を表す「そうだ」への埋め込みである。まず，(11) において，TP の主要部を占める「た」の右隣に「です」が生起していることから，TP より上位に「です」が生起していることが示唆される。[4] さらに，「*太郎は賢いでした」のように，丁寧語 B に時制要素の「た」を接続できないことからも「です」が CP に基底生成されていることが支持される (辻村 1967)。言い換えると，T 主要部を占める「た」は CP を選択できないため，「*太郎は賢いでした」のような文は非文になると言える。

次に，(13) のように，伝聞の「そうだ」の補部には丁寧語 B は生起できない。

(13)　*[太郎がそれを読まなかったです] そうです。

伝聞の「そうだ」が TP を補部にとるという想定と丁寧語 B が CP の主要部に基底生成されるという想定から，(13) の非文法性を導くことができる。[5] このように，丁寧語には 2 つのタ

---

[4] 査読者の 1 人が指摘しているように，TP を細分化する分析をとれば，「です」は TP 領域内において「た」より高い構造位置に現れるという可能性もある。本論では，TP を細分化する分析を採用していないため，TP より上位の領域（すなわち CP 領域）に「です」が基底生成されると想定する。一方で，CP については厳密には分離 CP 構造を仮定したほうが望ましい。というのも，もう 1 人の査読者が指摘しているように，「僕は太郎が来るまいと思った」や「僕は太郎が来るのだろうと思っていた」のような文では，CP の主要部に現れる要素が複数共起できるからである。ただし，日本語の CP 領域を追究することは本論の目的ではないため，これ以上立ち入らない。

[5] 査読者の 1 人から，(9b) と (10) と (13) に意味的な要因が絡んでいる可能性をどのように排除するのかという指摘を受けた。伝聞は，「そうだ」のような形式で表すこともできるが，「私は誰かが〜と

イプがある。

(9b) でモーダルの「まい」が伝聞の「そうだ」の補部に表出できないことをみたが，すべてのモーダルが CP に生起するわけではない。モーダルの「かもしれない」や「にちがいない」は，CP の主要部に現れるのではなく，(14) のように，二重の TP からなる構造をもつ (長谷川 1999: 166; 岸本 2005: 56)。

(14) [$_{TP}$ [$_{TP}$ ……] *kamosirenai*/*nitigainai*]

(15a) からわかるように，これらのモーダルには時制要素の「た」が接続できる (仁田 1991)。さらに，(15b) では，「かもしれない」と「にちがいない」の内部に丁寧語 A「ます」の未然形「ませ」が現れている。丁寧語 A が TP より下位に基底生成される要素であることを踏まえると，これらのモーダルが CP に現れているとは考えられない。

(15) a. 太郎が来る｛かもしれなかっ／にちがいなかっ｝た。
b. 太郎が来る｛かもしれません／にちがいありません｝。
c. 太郎が来る｛かもしれない／にちがいない｝です。

また，(15c) のように，これらのモーダルの右隣には丁寧語 B の「です」が現れる。このことも，これら 2 つのモーダルが CP より下位に生起していることを表している。

(16) のように，これらのモーダルは伝聞の「そうだ」の補部に生起可能である。これは，「かもしれない」と「にちがいない」が CP より下位の構造位置に存在しているからである。

(16) [太郎が来る｛かもしれない／にちがいない｝] そうだ。

さらに言えば，(10) と (16) の対比から，「かもしれない」と「にちがいない」が CP に主要部移動する可能性も排除される。「かもしれない」や「にちがいない」が CP に移動するのであれば，(10) のように非文になることが予測されるからである。

もう 1 点付け加えると，「かもしれない」が縮約してできたと考えられる「かも」は，(17b) のように，CP に基底生成される。この仮説は，(17c) から確認できるように，伝聞を表す「そうだ」の補部に埋め込むことができないことを適切に説明できる。

(17) a. 太郎が来るかも。 b. [$_{CP}$ [$_{TP}$ ……] *kamo*]
c. *[太郎が本を来るかも] そうだ。

(16) でみたように，「かもしれない」であれば，伝聞の「そうだ」の補部に現れることができるので，(17c) の不適格性は意味的な理由によるものではない。

言っているのを聞いた」のような迂言的な表現も可能である。(i) - (iv) からわかるように，「まい」や「よ・ね」や丁寧語とともに現れることができる。

i. 私は誰かが太郎は本を読むまいと言っているのを聞いた。
ii. 私は誰かが太郎が本を読む｛よ／ね｝と言っているのを聞いた。
iii. 私は誰かが太郎がそれを読みましたと言っているのを聞いた。
iv. 私は誰かが太郎がそれを読まなかったですと言っているのを聞いた。

したがって，(9b) と (10) と (13) は，伝聞の意味が「まい」や「よ・ね」や丁寧語のもつ意味と合わないために不適格になっているとは考えられない。

このように，伝聞の「そうだ」への埋め込みのテストなどを用いることで，丁寧語やモーダルの構造位置を特定することができる。

4　想起の「た」と TP

本節では，想起の「た」に関するデータから，コピュラの Foc 主要部仮説の問題点を指摘し，さらには，CP より下位にコピュラが基底生成されることを示す。

(18) にみられるように，「のだ」文や「のですか」文や埋め込み節に現れるコピュラには，「た」が接続できる。

(18)　a.　太郎は明日来るんだった。
　　b.　太郎は明日来るんでしたかね。
　　c.　太郎は明日誰が来るんだったか忘れた。

一般的な分析では，「た」は TP の主要部を占める要素であると想定されている。そうすると，(18) の事実は，コピュラが TP より下位に生起していることを示唆することになる。ところが，Hiraiwa & Ishihara (2012: 155, footnote 16) や Kuwabara (2013: 98, footnote 12) は，「た」の接続は Foc 主要部仮説の問題にならないとしている (Hasegawa (2011) も参照)。Hiraiwa & Ishihara (2012) は，(18a) のような文における「た」の解釈に着目しており，「た」が時制に関する情報ではなく，記憶の想起や確認を表していることから，この場合の「た」をモーダル助詞 (modal particle) と呼んでいる。[6] Hiraiwa & Ishihara (2012) では，コピュラの「だ」が FocP の主要部に基底生成されると仮定されているので，「た」はコピュラと 1 語になって Foc 主要部に現れているか，FocP より上位の投射に現れているかのどちらかであると考えられる。ところが，モーダル助詞の「た」の正確な階層位置については具体的に論じられていないことから，Hiraiwa & Ishihara (2012) の主張には議論の余地がある。

また，Hiraiwa & Ishihara (2012) は，(18) における「た」は過去を表さないため，「た」の接続はコピュラの Foc 主要部仮説の反例とはならないとしているが，英語でも，TP の主要部に現れる語が過去形であっても，過去の事態を表さないことがある。(19) では，助動詞 can の過去形 could が現れているが，この文の could は過去の事態ではなく未来に起こりうる仮定的な事態を記述している。

(19)　It could rain tomorrow.

could の左隣には主語の It が生起していることから，could は CP ではなく TP にとどまっていることがうかがえる。このことは，T 主要部を占める要素は，活用形が過去形であっても，過去を表していなくてもよいことを示唆している。このため，日本語における想起の「た」についても TP の主要部にとどまっている可能性があり，想起の「た」に関しては異なる観点か

[6] Hiraiwa & Ishihara (2012: 155, footnote 16) は，「のだ」文の「だ」の右隣に現れる「た」は，過去を表すことはできないと記述している。ところが，森山 (2021) で指摘されているように，「太郎は何も言わずに黙々と作業を続けるのだった」という文においては，「た」は，文で表されている事態が過去に起きたことを意味している。

らの検証が求められる。

想起の「た」の構造位置は，「のだ」文への埋め込みのテストから検証できる。Hiraiwa & Ishihara (2002, 2012) で主張されているように，「のだ」文の「の」は，TP を補部にとると考えられる。(20a, b) は，CP に基底生成される「まい」，「かも」，「よ」，「ね」および CP に主要部移動する丁寧語 A の「ます」を「のだ」文に埋め込むことが不可能であることを示している（野田 (1997: 35) にも同様の観察がある）。[7]

(20) a. *[太郎が本を読む｛まい／かも／よ／ね｝] のだ。

b. *[太郎が本を読みます] のです。

c. [太郎が本を読む｛かもしれない／にちがいない｝] のだ。

「かもしれない」や「にちがいない」は，CP より下位にとどまるので，(20c) のように，「のだ」文に埋め込むことができる。

仮に，想起の「た」が CP に生起するのであれば，「のだ」文には埋め込めないことが予測される。(21b) は，想起の「た」を含む (21a) に「のだ (んだ)」が接続した例で，容認可能である (田野村 1990: 124; 日本語記述文法研究会(編) 2007: 146)。

(21) a. 忘れていた。明日は試合があった。

b. 忘れていた。[$_{TP}$ 明日試合があった] んだ。

このことから，想起の「た」は TP 内に生起しているということができる。さらに，動詞の「ある」の右側に現れていることから，「た」は VP より上位に存在する。このことを考慮に入れると，想起の「た」は TP の主要部に置かれるとみるのが妥当である。

「た」は想起以外にもさまざまな意味を表す (日本語記述文法研究会(編) 2007)。(22) は，発見の「た」と反実仮想の「た」の例である。

(22) a. あ，ここにあった。

b. あそこでヒットが出れば勝てた。

(23) に例を示しているように，どちらも「のだ」文への埋め込みが可能である。したがって，

---

[7] 査読者の 1 人から，アニメなどでは，(i) のような例が容認されるため，「のだ」文が TP を補部に選択するという見方には再考の余地があるのではないかとの指摘を受けた。

i. 私がやりますのですわ。

(i) では，丁寧語が「のだ」文の埋め込み節に現れているが，この場合の「のだ」は役割語 (金水 2003) として現れていることに注意する必要がある。役割語は，一般的な用法とはかけ離れた異なる振る舞いをすることがあり，役割語のもとになっている形式と役割語化した形式は統語的に似て非なるものであることがある。例えば，3 節では，「*太郎は来たです」のような文が容認されないという事実に関して，丁寧語 B「です」の生起には形容詞型の活用語が含まれることが条件となるため，非文となると論じた。しかし，アニメでは「太郎は来たデス」のような文が現れることがある。このことから，役割語のデスには，形容詞型の活用語を伴わなければならないという条件が課せられないことがわかる。このように，役割語はもとの形式とは異なる振る舞いをすることがあるのである。同様に，標準日本語における「のだ」文と (i) のような「のだ」文についても，両者は区別して考える必要があるであろう。

発見の「た」と反実仮想の「た」についても，TP の主要部に現れているということになる。

(23) a. あ，[$_{TP}$ ここにあった] んだ。

b. [$_{TP}$ あそこでヒットが出れば勝てた] んだ。

英語の助動詞の過去形と同じように，過去を表していない場合でも「た」は TP の主要部に生起しているのである。管見の限り，過去を表さない「た」のケースにおいて，「た」が文の構造のどのような位置に現れるかを確かめるテストは提示されていない。本論における「のだ」文への埋め込みのテストは，過去を表さない「た」の構造位置を特定するための有効なテストとなる。

本論では，「のだ」文が (24a) のような構造をもつと主張する。「のだ」文は，「かもしれない」や「にちがいない」と同じく二重の TP からなる構造をもつ。[8] (24b) と (24c) は，それぞれ，「のですか」文と埋め込み節に現れる「だ」の統語構造を表している。

(24) a. [$_{TP}$ [$_{CopP}$ [$_{CP}$ [$_{TP}$ ……] *no*] ***da***] T]

b. [$_{CP}$ [$_{TP}$ [$_{CopP}$ [$_{CP}$ [$_{TP}$ ……] *no*] ~~***desu***~~] ~~*desu*~~] *desu-ka*]

c. [$_{CP}$ [$_{TP}$ [$_{CopP}$ [$_{CP}$ [$_{TP}$ ……] *no*] ***da***] T] *ka*]

「だ」や「です」は CopP の主要部を占めると仮定する（この点については，6 節で論ずる）。また，これらの構文に含まれる「の」については，「太郎 {が／*の} 来たのだ」のように，「が／の」交替が容認されないことから，名詞ではなく CP の主要部を占めると想定している (三上 1953)。

「のだ」文や「のですか」文や埋め込み節に現れる「だ」は，「た」の接続が可能なので，TP の下位に生起しているということができる。さらに，「のだ」文だけでなく，「のですか」文や埋め込み節（「のだか」）にも「のだ（のです）」が含まれている。「のですか」文は，二重の TP からなる「のだ」文に（丁寧語 B ではなく）丁寧語 A の「です」が現れたもので，埋め込み節（「のだか」）は，「のだ」文が埋め込まれた文であると考えられる。

なお，(24) の階層構造が正しければ，(24) の後ろに「のだ」を後続させることができることが予測されるが，(25) のように不適格となる（(Ono 2006: 6) に類似の指摘がある）。

(25) *太郎が明日来るんだったんだ。

ただし，この文の不適格性は統語的な要因によるものではないと考えられる。(26) のように，「かもしれない」や「にちがいない」でも同様に回帰的な埋め込みが不可能である。

(26) a. *[[[太郎が本を読む] かもしれなかった] かもしれない]

b. *[[[太郎が本を読む] にちがいなかった] にちがいない]

(25) と (26) が不適格になるのは，同一形式の連続によって文の解析が困難になるためであると考えられる。

---

[8] 1 名の査読者は，「明日試合があったんだった」のように，「た」は 2 箇所に同時に生起できると判断している。本論の分析では，「のだ」文は，[$_{TP}$ [$_{CopP}$ [$_{CP}$ [$_{TP}$ ……] *no*] ***da***] T] で示される構造をもつので，「のだ」の補部の T 主要部と主節の T 主要部の両方に「た」が生起できることを正しく予測する。

5　「であります」との交替

本節では，「のだ」文，「ですか」文，そして「のだろう」文に現れるコピュラが CP より下位の階層位置に生起することを，「であります」のテストにもとづいて示す。

「であります」は，「で」と「ある」と「ます」の 3 つの語から構成される。このことは，(27a, b) のように，「で」と「ある」の間と「ある」と「ます」の間に取り立て詞の挿入が可能であることから確認できる（(27b) では取り立て詞の直後で代動詞「する」の挿入が行われている）。

(27)　a.　彼の言っていることは本当では<u>は</u>ありました。

　　b.　彼の言っていることは本当であり<u>は</u>しました。

　　c.　*-de-ari-mas*

取り立て詞は語の右端に挿入できるが，「*神戸<u>は</u>大学」のように語の中間には挿入できない (Kishimoto 2007)。したがって，(27c) のように，「で」，「ある」，および「ます」は，一語化しているのではなく，それぞれ独立した語であるといえる。

「であります」には丁寧語 A の「ます」が含まれているため，(28a) のように，TP の主要部を占める時制要素「た」の左側に現れることはできる。一方で，CP に基底生成される丁寧語 B とは異なり，時制要素「た」の右側には生起できないことが (28b) から確認できる。[9] このことは，「であります」の「ます」が TP より下位に現れていることを示唆する。さらに，(28c) のように，伝聞の「そうだ」の補部に生起できないことから，丁寧語の「ます」は CP に主要部移動する。

(28)　a.　それは私にとって念願<u>でありました</u>。

　　b.　?*太郎は学校に来なかった<u>であります</u>。

　　c.　*[彼の言っていることは本当<u>であります</u>] そうです。

　　d.　[$_{CP}$ [$_{TP}$ …*-de-ari-~~masu~~*] *masu*]

本論では，「であります」は，(28d) のような構造をもつと想定する。3 節ですでに述べたように，丁寧語 A の「ます」は TP より下位に基底生成され，CP に主要部移動する。

(28d) の構造をもつ「であります」は，「のだ」文においても生起可能である。(29a) は「のだ」文の「だ」が現れた例であるが，(29b) では，同じ位置に「であります」が生起している。

(29)　a.　太郎が来たのだ。

　　b.　太郎が来たの<u>であります</u>。

　　c.　[$_{CP}$ [$_{TP}$ [$_{CP}$ [$_{TP}$ ……] *no*] *-de-ari-~~masu~~*] *masu*]

---

[9] 「であります」は，アニメや漫画などで役割語として使用されることがある。役割語の「デアリマス」は「今日は楽しかった<u>た</u>デアリマス」のように，時制要素の右隣に生起できる。しかし，「*今日は楽しかったデ<u>は</u>アリマス」や「*今日は楽しかったデアリ<u>は</u>しマス」のような取り立て詞の挿入は不可能である。このことは，役割語の「デアリマス」が一語化していることを表している。本節で扱っている「であります」とは性質が異なるため注意する必要がある。

「のだ」文に現れるコピュラが CP に基底生成されるのであれば，その位置に「であります」が現れることができないことが予測される。(28) で確認したように，「であります」は TP より下位に基底生成されるからである。(29b) で「であります」の生起が可能であることから，「のだ」文のコピュラは，(29c) のように，TP より下位に生起していると考えるのが適切である（前節で触れたように，「の」は CP の主要部を占めると仮定する）。

(30a) は「のですか」文の例で，(30b) では「です」のかわりに「であります」が現れている。疑問文の肯定文で「であります」が使用されるときわめて改まった文体になる。疑問文の否定文に「であります」が現れた (30c) は丁寧な文体で日常的に使用される。文体に違いはあるが，肯否にかかわらず，「であります」が現れることができる。

(30) a. 太郎は何を読んだのですか。

b. 太郎は何を読んだのであります<u>か</u>？

c. 太郎が来たのではありませんか。

d. [$_{CP}$ [$_{TP}$ [$_{CP}$ [$_{TP}$ ……] *no*] *-de-ari-~~masu~~*] *masu-ka*]

「であります」が生起可能であることから，「のですか」文におけるコピュラ位置も，(30b) のように，CP より下位にあることが示唆される。

(31a) は「のだろう」文の例で，(31b) では「だろう」の位置に「でありましょ」が現れている。

(31) a. 太郎が来るのだろう。 b. 太郎が来るのでありましょう。

c. [$_{CP}$ [$_{TP}$ [$_{CP}$ [$_{TP}$ ……] *no*] *-de-ari-~~masyo~~*] *masyo-o*]

前節では「のだろう」文のコピュラの構造位置については論じなかったが，「のだろう」文におけるコピュラについても，「でありましょ」の生起が可能であることから，(31c) のように，CP より下位に基底生成されていると仮定する。[10]

6 コピュラの構造位置

4 節の「た」の接続と 5 節の「であります」との交替に関わるデータから，コピュラが CP より下位に現れることを論じた。本節では，コピュラ「だ／です」が TP の下位の CopP に基底生成されることを示す。

否定事態の推量を表す「まい」は動詞にのみ接続可能であるという特徴がある。(32a) と (32b, c) の対比が示しているように，「まい」は動詞に接続できるが，形容詞や名詞には接続できない。

---

[10] 脚注 9 に関連して，(29b) と (30b) と (31b) で取り立て詞の挿入が可能であることを示しておく必要がある。(i) は「のだ」文，(ii) は「のですか」文，(iii) は「のだろう」文におけるコピュラの位置に「であります」が現れている例で，取り立て詞の「は」が挿入可能であることを表している。

i. 安物ですので仕方ないので<u>は</u>ありますが，すぐに使えなくなってしまいました。

ii. それはただの道具にすぎないので<u>は</u>ありますまいか。

iii. 安物ですので仕方ないので<u>は</u>ありましょうが，すぐに使えなくなってしまいました。

(32)　a.　太郎は来るまい。　b.　*明日は暑いまい。　c.　*太郎は犯人まい。

また,「*太郎は来たまい」のように,「まい」は時制要素「た」に接続できない。(32) の「まい」は動詞の終止形に接続しているといえる。言い換えると,「まい」は形態的には動詞に接続するという特徴を有している（母音語幹動詞では,「まい」は語幹に接続することも可能である)。

「まい」が接続するものには,「来る」や「食べる」のような実質的な意味を有する動詞だけでなく，使役の「させる」や受身の「られる」のように，意味が抽象化し，文法機能を有する動詞も含まれる。

(33)　a.　太郎は花子を塾に行かせるまい。

b.　金庫に入れておけば，お金は盗まれるまい。

興味深いことに，丁寧語 A の「ます」についても「まい」の接続が可能である。(34) のように，同じく丁寧語である「ます」は「まい」との共起が許容される。このことは,「ます」が動詞の特性を有していることを意味している。

(34)　彼が来たのではありますまい。

一方で，同じ丁寧語であっても，(35) のように,「まい」を「です」に接続させることは不可能である。

(35)　*彼が来たのですまい。

この「です」の振る舞いは，コピュラ「だ」の振る舞いと並行的である。(36) は,「だ」への「まい」の接続が不可能であることを示している (田川 2009)。

(36)　*彼が来たのだまい。

「です」と「だ」には，いずれも名詞述語あるいは述語ではない体言（「の」など）につくという特徴がある。そのことを加味すると, (35) と (36) は同じ理由によって非文になっていると考えるのが妥当であろう。「です」と「だ」は終止形であるため，仮に「です」と「だ」が動詞であるならば,「まい」の接続が可能となってよいはずである。言い換えると，(35) と (36) は形態的な理由で不適格になっているとは考えられない。

(35) と (36) が意味的な理由で不適格になっているという可能性もあるが，そのような可能性は以下のような理由から排除できる。まず,「です」については，同じ丁寧語の「ます」であれば「まい」の接続が可能なので,「です」がもつ丁寧さの意味が「まい」と整合しないことによって (35) が不適格になっているとは考えられない。次に,「だ」については, (37) のように，意味的には大きな違いのない「である」では「まい」の接続が可能であることから，意味的な理由で (36) が非文になっていると考えることはできない。

(37)　彼が来たのではあるまい。

形態的な理由でも意味的な理由でもないとすれば，(35) と (36) は統語的な理由によって非文になると考えて差し支えないであろう。これらの事実を統語論でどのように扱うかについては，理論的想定に応じてさまざまな可能性が考えられるが，本論では，以下のような分析を仮定する。(39a) のように,「まい」は動詞句を補部に取り，NegP の主要部から CP の主要部に移動すると想定する (cf. 岸本 2011; 田川 2009)。(38b) は「だ」の構造位置を，(38c)

は丁寧語 A「です」の構造位置を表している。「だ」と「です」はともにコピュラの投射である CopP の主要部に基底生成されると想定する。3 節で論じたように，丁寧語 A「です」については，CP への主要部移動を起こす。

(38) a. [$_{CP}$ [$_{TP}$ [$_{NegP}$ [$_{vP}$ ……] ~~*mai*~~] ~~*mai*~~] *mai*]
b. [$_{CP}$ [$_{TP}$ [$_{CopP}$ XP-*da*] T] C]
c. [$_{CP}$ [$_{TP}$ [$_{CopP}$ XP-~~*desu*~~] ~~*desu*~~] *desu*]

「まい」は vP を補部に選択するが，「だ」や「です」は CopP に生起するために，「まい」との共起が許されないと考えられる。

他方，丁寧語 A「ます」は「まい」の接続が可能であることから，(39a) のように，動詞句の主要部であると想定する。丁寧語 A「です」と同様に CP に主要部移動する。

(39) a. [$_{CP}$ [$_{TP}$ [$_{vP}$ …… ~~*masu*~~] ~~*masu*~~] *masu*]
b. [$_{CP}$ [$_{TP}$ [$_{vP}$ [$_{CopP}$ XP-*de*] *ar*] *u*] C]

(39b) は「である」の構造で，「で」は CopP，「ある (*ar*)」は動詞句に含まれる。「で」はコピュラ「だ」の連用形なので，「だ」と同様に CopP の主要部を占める（前節でみた「であります」は，[$_{CP}$ [$_{TP}$ [$_{vP}$ [$_{vP}$ [$_{CopP}$ XP-*de*] *ari*] ~~*masu*~~] ~~*masu*~~] *masu*] のような構造をもつ）。(38) と (39) の想定が唯一の可能性ではないが，このように想定することで (34) から (37) までの例文の文法性が導かれることになる（使役の「させる」や受身の「られる」も動詞句の主要部を占めると仮定する）。

本論の主張とは異なり，田川 (2009) は，Nishiyama (1999) に従い，「だ」を「である」の短縮形であるとしている。分散形態論の枠組みのもとで，「まい」は NegP と TP と MP（モダリティの投射）の主要部に対応する音声出力である一方で，「である」の縮約形「だ」は，（本論の CopP に相当する）PredP，動詞句，TP の主要部の音声出力であると想定している。(36) のような文では，TP の主要部の音声化をめぐって「だ」と「まい」が競合してしまうため，非文になると論じられている。このように，田川 (2009) では，「である」と「だ」がもつ統語構造は同一であると考えられている。

本論で田川 (2009) の分析を採用していないのは，「だ」と「です」の両方が「まい」の接続を許さない点を同時に捉えるためである。「だ」に関しては田川 (2009) で提案されているメカニズムによって説明できるが，「です」に関しては問題が生じる。「です」も PredP，動詞句，TP の主要部に対応する音声出力であると想定すれば，非文法性を説明できないわけではない。しかし，同じ丁寧語である「ます」では容認可能である。「です」では「まい」との間に TP 主要部をめぐる競合が起きるのに対して，「ます」では競合が起きないのはなぜなのかを説明する必要がある。

また，Yamada (2019) や Miyagawa (2022) は，丁寧語 A「ます」の基底生成位置について議論している。Yamada (2019) は，分散形態論の枠組みのもとで，「ます」は NegP の主要部に挿入されると主張している。また，Miyagawa (2022) では，vP と NegP の中間に投射される AgrP の主要部に「ます」が現れる。本論では，「ます」が動詞の特徴をもつことから，Neg や Agr ではなく動詞句の主要部を占めると仮定している。

ここまでの議論を総合すると，「のだ」文，「のですか」疑問文，埋め込み節，「のだろう」文に現れるコピュラの「だ」や「です」は，(40) のように，CopP の主要部に生起すると結論づけられる。

(40) a. [$_{TP}$ [$_{CopP}$ [$_{CP}$ [$_{TP}$ ……] *no*] ***da***] T]

b. [$_{CP}$ [$_{TP}$ [$_{CopP}$ [$_{CP}$ [$_{TP}$ ……] *no*] ~~***desu***~~] ~~*desu*~~] *desu-ka*]

c. [$_{CP}$ [$_{TP}$ [$_{CopP}$ [$_{CP}$ [$_{TP}$ ……] *no*] ***da***] T] *ka*]

d. [$_{CP}$ [$_{TP}$ [$_{CopP}$ [$_{CP}$ [$_{TP}$ ……] *no*] ***daro***] T] *-o*]

これらの構文の共通点は，いずれも二重の TP からなる「のだ／のです」文が含まれていることである。「のだろう」文については，「*太郎が来るのだろうそうだ。」のように，TP を選択する伝聞の「そうだ」に埋め込めないことから，推量辞の「う」は CP の主要部に基底生成されると仮定している。

ここまで，Hiraiwa & Ishihara (2002, 2012) 等で採用されているコピュラの Foc 主要部仮説は妥当でないことを論じてきたが，最後に，Foc 主要部仮説のもう 1 つの可能性とその問題点に言及する。Rizzi (1997) のカートグラフィーでは，FocP は TP より上位の階層位置に現れるが，TP の下位に FocP を立てる立場もある (Yanagida 1996, 2005; Belletti 2004)。そうすると，(41) のように，TP より下位に投射される FocP の主要部に「だ」が生起する可能性が生じる (Yanagida 2005: 80–84)。

(41) [$_{CP}$ [$_{TP}$ [$_{FocP}$ XP-*da*] T] C]

しかしながら，コピュラの「だ」は，焦点化が関与しない場合にも現れることができる。(42B) はコピュラの叙述文の例である（(42B) では「た」が後続していることから，「だ」は TP より下位に生起している）。

(42) A：太郎は優秀でしたか？ B：うん，太郎は優秀だったよ。

(42B) は，「太郎が優秀であったか」という問いに対する答えであり，焦点の解釈が生じる必要はない。もちろん，話し手が「太郎は」にストレスを置けば，「太郎」が対比主題になる解釈が生じるが，重要なのは，焦点の解釈が関与しないときにも「だ」が使用可能であるという点である。FocP は焦点化に関与する投射であるが，「だ」が現れても焦点の解釈が関与する必要はないため，「だ」が FocP の主要部を占めるとは考えがたい。焦点化が関与するときには TP より下位の Foc に現れ，焦点化が関与しないときには Cop に生起できると考えられないことはないが，理論的には「だ」を単一の投射に位置づけたほうが望ましい。この点については今後さらなる検討が必要であるが，いずれにしても，Hiraiwa & Ishihara (2002, 2012) の主張の骨格である CP 領域に「だ」が基底生成されるという分析は妥当ではなく，コピュラが CP より下位に存在するという本論の主張は保持される。

7 まとめ

本論では，「のだ」文と「のですか」疑問文と埋め込み節と「のだろう」文に生起するコピュラの「だ」や「です」が CopP の主要部を占めることを示した。先行研究では，想起の「た」の接続は，Foc 主要部仮説の反例とはならないと考えられているが，TP を補部にとる「のだ」

文に想起の「た」を埋め込むことができることから，想起の「た」は TP の主要部である。そのため，コピュラに想起の「た」が接続できるという事実は，Foc 主要部仮説にとって問題となる。また，「であります」と交替可能であることからも，「だ／です」は，Foc 主要部ではなく TP より下位に生起していると考えられる。さらに，「まい」が「だ／です」に接続できないないという事実は，「だ／です」が動詞ではないことを示唆している。本論では，コピュラの投射 CopP を仮定し，この投射の主要部に基底生成されることを提案した。

参考文献

Belletti, Adriana. 2004. Aspects of the low IP area. Luigi Rizzi (ed.) *The Structure of CP and IP*. 16–51. Oxford University Press.

遠藤喜雄・前田雅子. 2020.『カートグラフィー』開拓社.

長谷川信子. 1999.『生成日本語学入門』大修館書店.

Hasegawa, Nobuko. 2011. On the cleft construction: Is it simplex or complex? *Scientific Approaches to Language* 10, 13–32.

Hiraiwa, Ken & Shinichiro Ishihara. 2002. Missing links: Cleft, sluicing, and “no da” construction in Japanese. Tania Ionin, Heejeong Ko & Andrew Nevins (eds.) *Proceedings of the 2nd HUMIT Student Conference in Language Research*. 35–54. MITWPL.

Hiraiwa, Ken & Shinichiro Ishihara. 2012. Syntactic metamorphosis: Clefts, sluicing, and in-situ focus in Japanese. *Syntax* 15(2), 142–180.

金水敏. 2003.『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店.

岸本秀樹. 2005.『統語構造と文法関係』くろしお出版.

Kishimoto, Hideki. 2007. Negative scope and head raising in Japanese. *Lingua* 117, 247–288.

岸本秀樹. 2011. 節の周辺要素―モダリティと題目. 武内道子・佐藤裕美（編）『発話と文のモダリティ―対照研究の視点から―』115–137. ひつじ書房.

Kuwabara, Kazuki. 2013. Peripheral effects in Japanese questions and the fine structure of CP. *Lingua* 126, 92–119.

Maeda, Masako. 2014. *Derivational Feature-Based Relativized Minimality*. Kyushu University Press.

三原健一・平岩健. 2006.『新日本語の統語構造』松柏社.

三上章. 1953.『現代語法序説：シンタクスの試み』刀江書院.

Miyagawa, Shigeru. 1987. LF affix raising in Japanese. *Linguistic Inquiry* 18(2), 362–367.

Miyagawa, Shigeru. 2012. Agreements that occur mainly in main clauses. Lobke Aelbrecht, Liliane Haegeman & Rachel Nye (eds.) *Main Clause Phenomena: New Horizons*. 79–112. John Benjamins.

Miyagawa, Shigeru. 2017. *Agreement Beyond Phi*. MIT Press.

Miyagawa, Shigeru. 2022. *Syntax in the Treetop*. MIT Press.

森山倭成. 2021. In-situ focus 文の構造. *JELS* 38, 72–78.

森山倭成. 2022a.『節の右方周縁部における線形順序と階層構造』神戸大学博士論文.

森山倭成. 2022b. 日本語の分裂文の統語特性. *KLS Selected Papers* 4, 57–72.
日本語記述文法研究会（編）2007.『現代日本語文法 3』くろしお出版.
Nishiyama, Kunio. 1999. Adjectives and the copulas in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 8(3), 183–222.
仁田義雄. 1991.『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房.
野田春美. 1997.『の（だ）の機能』くろしお出版.
Noguchi, Yuya. 2020. On the embeddability of cleft *wh*-questions in Japanese. *Proceeding of the 28th Conference of the Student Organization of Linguistics in Europe*, 100–115.
Noguchi, Yuya. 2021. Clefts, freezing effects, and *wh*-movement in Japanese. *Japanese/Korean Linguistics* 28 (poster papers).
Ono, Hajime. 2006. *Investigation of Exclamatives in English and Japanese: Syntax and Sentence Processing*. Doctoral dissertation, University of Maryland.
Rizzi, Luigi. 1997. The fine structure of the left periphery. Liliane Haegeman (ed.) *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*. 281–337. Kluwer.
Saito, Mamoru. 2012. Sentence types and the Japanese right periphery. Günther Grewendorf & Thomas Ede Zimmermann (eds.) *Discourse and Grammar: From Sentence Types to Lexical Categories*. 147–175. De Gruyter Mouton.
Saito, Mamoru. 2015. Cartography and selection: Case studies in Japanese. Ur Shlonsky (ed.) *Beyond Functional Sequence*. 255–274. Oxford University Press.
田川拓海. 2009.『分散形態論による動詞の活用と語形成の研究』筑波大学博士論文.
田野村忠温. 1990.『現代日本語の文法―「のだ」の意味と用法―』和泉選書.
Tomioka, Satoshi & Keita Ishii. 2022. Being polite and subordinate: Morphosyntax determines the embeddability of Utterance Honorifics in Japanese. *Glossa: A Journal of General Linguistics* 44(1).
辻村敏樹. 1967.『現代の敬語』共文社.
Yamada, Akitaka. 2019. *The Syntax, Semantics and Pragmatics of Japanese Addressee-Honorific Markers*. Doctoral dissertation, Georgetown University.
Yanagida, Yuko. 1996. Syntactic QR in *wh*-in-situ languages. *Lingua* 99, 21–36.
Yanagida, Yuko. 2005. *The Syntax of FOCUS and WH-Questions in Japanese: A Cross-Linguistic Perspective*. Hituzi Syobo.

On the Hierarchical Position of Copulas

Kazushige Moriyama
Naruto University of Education

Abstract

This paper is concerned with the structural position of the copulas *da/desu* in Japanese. In previous studies, it has been proposed that *da* and *desu*, which occur in several constructions, occupy the head of FocP (Endo & Maeda 2020; Hiraiwa & Ishihara 2002, 2012; Kuwabara 2013; Maeda 2014; Noguchi 2020, 2021; Ono 2006). This paper points out that the previous claim fails to account for the sets of data which we present. It further argues that the copulas are located in the head of CopP, which is in a structural position below TP. In the course of the discussion, three sets of data are provided to identify the locus of the copulas. First, the use of *-ta* 'PST' as reminiscence offers a means to show that the copulas occur structurally below TP. Second, the alternation between *da/desu* and *de-ari-masu* 'COP-exist-HON' suggests that the copulas cannot be base-generated in CP. Finally, this paper proposes that the copulas *da* and *desu* serve as the head of CopP based on the fact that the modal marker *mai* 'not probable' must not be attached to them. In addition to the copulas *da/desu*, we also examine the structural positions of *masu* 'HON,' *de-aru* 'COP-V,' and *de-ari-masu* 'COP-exist-HON.'